とを祈願する。これが村人の信仰である。

観　音　堂　（大字湯八木沢）

本尊　子安観世音

当村の観音堂は湯八木沢橋近くの滝谷川左岸段丘に静かなたたずまいをみせている。『大沼郡誌』に、

「中ノ川村大字湯八木沢に在り本尊子安観世音にして安政元年三月十七日の建立なり、境内地二十四坪民有地なり会式三月十七日受持は牧沢村猿沢寺なり」

と安政元年（一八五四）を建立としているが、本尊に文化十年（一八一三）の銘があるからそれより四十年前となろう。堂宇は奥行二間半、間口四間半、ほぼ中央に間仕切りがあり通常の堂宇と違った様式で一見住宅風にみえる。これは昔尼寺であったと伝えられ、左半分は尼の住居であったと言われる。約三十坪の境内には墓石と思われる碑があったと言われるがこれは当寺先亡のものという。右半分には巾三尺長さ二間の祭壇があり、通常の堂にはみられない二本の丸柱と欄間には彫刻が施され寺の様式を備えている。中央に木彫坐像、御丈四十センチメートル、全高七十五センチメートルの本尊が安置されている。

「文化十□山和尚開眼　守行門人　桧原住人　鈴木隼人」

の銘がある。古来霊験あらたかな観音として信仰者を集め地方の参詣が多い。安政七年（一八六〇）には信者によって鰐口が寄進された。

現在の鰐口は鈴木鐵一氏が四十二才の厄払いに奉納したものである。明治十一年三月には法被打敷が寄進された。当時の世話人は飯塚徳七・小島市平・同半重郎・飯塚政吉である。

明治五年学制が布かれ、湯八木沢にも学校が設けられこの堂を学校としたのである。当時は極めて小規模で男子七人程度であったと言われる。

観音信仰は篤く昭和四十九年には堂内改装工事が行われた。古来三月十六日に参篭、十七日を会式としてきたが、現在は毎月観音講を催し慈悲を仰いである。

第三節　円蔵寺　（虚空蔵尊）

虚空蔵堂

本尊　福満虚空蔵尊

脇侍　賓頭盧尊者像（本尊と同木）

日本三虚空蔵と尊敬され全国的に著名な虚空蔵尊である。いろいろな伝承がある。ここでは、文化五年編『新編会津風土記』と、天保五年の円蔵寺出版『福満虚空蔵大菩薩略縁起』によって記しておく。

これによると、虚空蔵尊は真言宗の開祖弘法大師が、延暦二十三

年（八〇四）入唐して、唐の青龍寺名僧慧果より、両部の秘密をうけ大同元年（八〇六）帰国すると、師よりの真言を国界に伝布すべき命をうけたので、その地に仏教のセンターを造ろうと、愛樹と三鈷を海に投げられた。このうち三鈷は紀伊国室之郡南ノ山の松樹にかかったので、ここが今の高野山に定められ、真言宗の本山となった。また愛樹は紀伊国那智ノ浦に漂着し、更に安房国天之浦に漂着したという。空海は諸国行脚のとき、この木を見つけられ三切にされ、その本木で能満虚空蔵菩薩を彫んで安房国清澄に祭り、中木では大満虚空蔵菩薩を彫んで、常陸国村松に祭られた。末木は更に祈願をこめられ、再び海中に投入されると、越後国の海から押し揚げられ、いわゆる揚川を遡り三本柳の津に漂着した。この三本柳の地が現在の柳津のことで、楊津という。この只見川沿岸は一千百年前は、楊の木の群生地であったろうと考察される。ここで二人の漁翁がこの流木を拾いあげ、斧で割り焚火用にしようとしたところ、大音響を発したので故ある霊樹と考えて、盟神探湯をして神のお詫宣をうけると、霊木から声ありて「こは中天竺の愛樹で虚空蔵の霊木である」と解かった。二人の漁翁はおそれかしこみ、大師に捧げると彫刻されたのが、福満虚空蔵尊であるという。大師は更に余木で七難即滅の御守護として、虚空蔵菩薩の尊像を彫んだものが奥之院に秘蔵されている板木なのである（奥之院参照）。更に余木で賓頭盧像を彫み庶民信仰にされて仏教信仰をひろめられた。

菊光堂（虚空蔵堂）全景

ここで弘法大師が唐から帰朝して全国に信仰の広がった虚空蔵菩薩について仏像解説図絵によると、虚空蔵菩薩は五法五仏の法体であるから、虚空法界において事として悟りを得ざることなし。あたかも虚空には限界がないように、この菩薩は大悲利生の智恵は無限であると述べられている。また霊厳山大観によって、御本尊の御姿を拝すると、蓮華座に坐し、頭には五智の如来の宝冠を戴き、左手に福徳の開敷蓮華を持ち、右手は優しく施無印を表わしている。又更に一体は右手剣をもつ本尊もある。これま五智如来の所変であるので、五大虚空蔵としての形象でもある。即ち本尊を修する虚空蔵救聞法は、頭脳を明快にし記憶力を増大すると言われている。そのほか俗信仰では一切香集世界に住し、三十三の忌仏といわれ、一代守

本尊では丑・寅の歳に生まれた人々の守本尊で縁日は十三日となっていて、この日は参詣者も非常に多いという。この十三の日に肖(あやか)って、十三詣りの信仰が普及した。

またこのときの漁翁の一人が坂上家の先祖で、あとで境内に龍蔵権現として祭られ、他の一人は同じく円生明神に祭られた。毎年正月三日一回、賓頭盧は坂上家に一夜遊行される慣習が、寛文（一六六〇年代）から三百余年の歴史を継承されていることは驚くべき事実である。更にまた一説に創建は、徳一大師であるとも考えられる。空海はこのころ、筑紫の大宰府観世音寺に住まわれているのが正史である。

また一説に別当円蔵寺と共に、弘仁三年（八一二）に天台宗の慈覚が創建したともいう。いづれにしても、僅か四年の差で平安初期の草創であることは誤りない。

徳一の開基五寺（恵日寺・勝常寺・円蔵寺・仁王寺・如法寺）は通説である。虚空蔵尊像が彫成（一寸八分の尊像）されると徳一はその祀処(まつりどころ)を考えられ、柳津から川上十数里の沿岸を探索された。金山町水沼地内の赤沢谷（国鉄鉄橋のある辺）の大崖壁も、地方の人がこの岩上に柳津虚空蔵様が祭られたことがあるという伝承があるのも、霊場の候補地とお考えになられたのではなかろうか。然し柳津以外の地は霊場として思わしくなかったので、鎮めまつる地としてこの地にさだめられた。徒(かち)の川上十数里の旅は無為であったため、柳津より川上を「只見川」と命名されたと伝えている。柳津は風致といい、地勢といいまったく西方仏土の香集界であると考えられ、徳一は河岸に一宇をたてて尊像を祭り、護摩修行をなすと、たちまち紫雲が静かにたなびき、明星白蛇に乗り降り給うた。その跡が明星石であり、この明星が奥之院の御本尊明星天子である。

なお御堂(みどう)の遷座を記す。

①延徳（一四八九―九一）までは詳にわからない。
②延徳三年（一四九一）に、御堂の修復をする。
③永正十三年（一五一六）三月二十八日全焼する。
④享禄四年（一五三一）本堂旧のように再建。
⑤元亀二年（一五七一）別当厚元普く人々に勧めて、その柱を金銀色、縁(えん)を極彩色にしたため、参詣人は「光堂」と自ら唱(おのづか)えた。
⑥天正七年（一五八九）三月七日に全焼する。このとき領主芦名盛氏は再建資金のいくらかを出して造営させた。
⑦慶長十六年（一六一一）八月二十一日辰ノ下刻（午前九時）に大地震があり、山は崩れ岩は裂け、御堂及本坊・僧舎・民家の悉くが倒れ、圧死する人が多かった。特に川上五里にある堂岩山崩れ、只見川を堰とめ三里余が湖のようになる。特に下椿村の川中の砂岸が地震のために急に隆起し、高さ十丈余の山となり水をせきとめた。その後八日の暁に堂岩山の湛水が一時に流れ出した。このときの音は万雷の響きのようであったと記してある。この水は下椿村の突出堰でとめられ、逆流して三里余は再び湖水となり、柳津村は完全に水没した。昔、柳津は竜ケ渕

とて湖水であったと古書にみえているので、そのときが再現されたと記してある。村中の男女は恐れ諏訪山に逃げ登り泣き叫んだ。七日を経て下椿村の堰は左右から崩れはじめ、沿岸の樹木岩崖すべてを削り流した。虚空蔵堂下の只見川中の巨石もこのときのものが、いくつかあるかも知れない。このとき御本尊をはじめ、古文書、経典、什物・宝物はすべて流失し、山主はじめ塔頭衆・信徒はただ手をこまぬいだ。

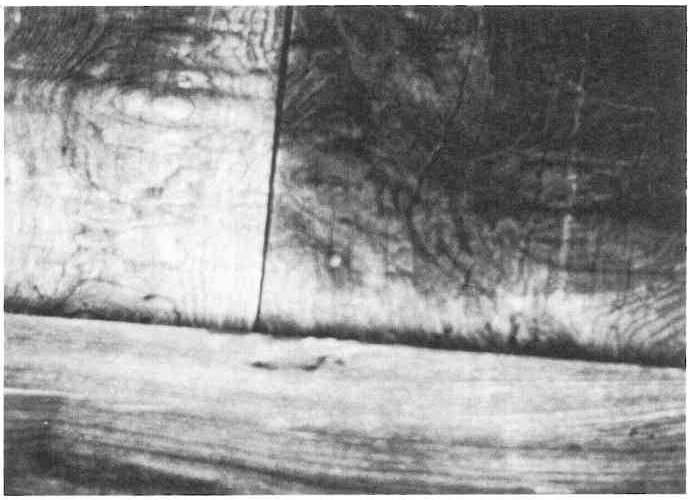
その数日後に、向いの小山で毎夜光のほのかに輝くをみつけて衆徒ここへ登ると、芳香のかんばしさに不思議に思い、近所を尋ねると、石上に虚空蔵尊と賓頭盧尊の両像のおわしますをよろこび、虚空蔵尊を大衣に、賓頭盧尊を欝多羅衣に包み拝して抱きもちかえられ草堂に奉安された。この光りを霊異として、これから瑞光山と名づけた。このとき「奥之院」石階は数段まで水没したと記述されている。

この惨状を時の領主蒲生秀行に告げ復興への御助力を訴えると非常に驚かれ、九月に家臣溝口右馬介、村田加兵衛を柳津につかわされて実情を見聞きさせ、五間四面の草堂を造らせ暫く祭るよう指示された。

⑧元和三年（一六一七）河岸旧地から、はじめて現崖上に移し祭る。このとき大助力をされたのが、紀州浅野家の正清院殿（蒲生忠郷の母）で、会津蒲生家に住んだとき心願をかけられたことが叶いとげられ、念願成就報恩のため、旧臣外池伊織・村田加兵衛を遣し、水難をさけるため巌上に祭ることを虚空蔵尊の御心に伺い、おゆるしを得て現地に移し祭られた。いわゆる柳津虚空蔵堂の掛けづくりであり、柳津の舞台がはじめられた。これから一層の尊厳さと信仰者が広くなった。

⑨文政元年（一八一八）六月二十四日昼四ツ時（午前十時―十一時）に、一老人が只見川内で芥をあつめて焼くうちに、強風がにわかに吹きあれて、火の紛が散乱して数十軒の屋上に吹きつけた。それが一時に火災となり、防火の手だてもなく、二百余年の光堂はここでまた全焼して灰となった。このとき御堂のほか、本坊・再建中の三重塔も建造半ばで焼失したのである。しかし幸いにも御本尊と諸祭具と什物は難を免かれた。このときの住持喝岩は復興に死力を尽した。そのため坊中村人一致協力し、藩主松平家からも莫大の寄進をうけ、特に巨材と金子を賜わり、且つ京都・大坂の富豪、更に会津は勿論他国の信者から惜気もなく寄進されて、時の貨幣で数千万両に及んだ。この熱意は工事人の心にも伝わり、風雨をものともせず寝食を忘れて造営に努めたため、文政十二年（一八二九）八月十三日、現堂で大落慶と遷座大供養が行われた。総欅造りの扇垂木、二重破風でこの豪荘な御堂は今日ではや百五十年の信仰史を秘めているのである。特に七折以西で、唐破風と妻破風の二重破風造はこれが最初なのである。

この堂の腰板に銃弾が入っている。会津戦争のとき西軍から打



戊辰戦争の際の銃弾跡（虚空蔵堂腰板）

込まれたもので、柳津における戦斗のはげしさの証拠である。

ここで東軍の長谷川一太郎が負傷し途中で死亡した。

菊光堂（虚空蔵堂）欅丸柱の床下入角柱に出材地名墨書がみえるが、二十五本は風化して不明である（第七章第一節の図参照）

⑩昭和三十三年（一九五九）徳一大師当寺御開山一千百五十年祭を施行した。このとき信者の誠意により、虚空蔵堂屋根を銅板葺に改装した。菊光堂らしく棟には菊花が黄金色に朝日・夕日に輝いている。虚空蔵尊の尊さが一層輝いた。

⑪昭和四十三年秋、裏山道の中段に裏山門を建てた。

⑫昭和四十六年五月には、柳津舞台の脚部の木造をコンクリートに改装し、永久に動きない霊場となった。

こうして虚空蔵尊の信仰は、大同の昔から現在まで一千百有余年の長い歴史がある。

古い人も新しい時代の人も幸福を願わない人はいない。さきにも述べた幸福の三願の素朴な内容は、虚空蔵尊の御利益によって満たされると信じていた。己れの幸福のため、幸福という明るい語感のイメージは広く人々の信仰を集めた。特に日本三虚空蔵尊という尊さは、一層信者への印象を深くした。信者は毎年参拝を望んでいたのであろうが、代参制も考え、同信仰者は福満講を結んでいる。本県は勿論、新潟県・山形県にも分布している。（第七章第三節の講中の分布図参照）。

また個人参詣者も年間四十万人を越し、そのうちで心願をかけて月詣（つきまいり）をする信者も多い。更に十二支の信仰として守本尊がある（民俗編参照）。そのうち、丑寅生れの人は守本尊が虚空蔵尊である。一生の中の災難を除け、幸のあるように守護し給うという御利益があるのである。

更に「柳津十三詣（まいり）」という信仰行事がある。生れて十三歳になったとき、必ず虚空蔵菩薩尊参詣を済ますことになっている。明治末期までは十三歳になると、特に仕立てた新衣装を着せられ親と同行して必ず参詣し、柳津の粟饅頭を食べ、魚渕のうぐいをみて帰宅した。

大正時代になると、会津は小学校六年級の遠足は必ず柳津虚空蔵詣りを行った。現在でもこの行事は絶えなく続けられている行事で

ある。

庶民信仰もほとんど全国的といってもよいであろう。現堂の落書の拾書をみても、信仰の広域性は驚くばかりである（第七章第三節の参詣落書分布図参照）。

信仰の熱烈さは寄進の夥しいのでも知られる（第七章第三節の献灯籠分布図参照）。また堂内の献額も巨大な額で、著名人の画や書等も多い。特に東入口にあった「香集界」と西入口にあった林道栄書の「菊光堂」の二枚は文化財的な価値がある。現在は宝庫に納められてある。

また奉納のうちで特筆すべきものに、細越の豪族が円蔵寺に奉納されたものがある。虚空蔵菩薩陀羅尼経の版経である。これは細越の豪族猪俣美濃良種が、天正十三年（一五八五）九月に刊行したもので、会津版として文化的価値の高いものである。この作者は山伏の泉蔵房である旨がみえる。この文を示すと次のようである。

「奉寄進虚空蔵経板起処現世安穏後生善処別子孫繁昌故也
願主奥州会津稲川荘細越村住人猪俣美濃守良種幷作者山伏泉蔵坊
時天正十三年乙酉九月吉日」

と刻されている。この良種はまた天正十五年（一五八七）十月に虚空蔵堂に鰐口一口をも奉納している。その銘に、

「奉掛鰐口諸願成就皆令満足之所也仍檀那細越村猪俣美濃守吉種
干時天正十五年丁亥十月七日云云」

とあり、良が吉になっているが、前の御経奉納の二年後のことなので、おそらく同人と思われる。

現在の鰐口は頗る大型で、虚空蔵堂の豪荘さによく調和している。これは明治二十二年丑六月十三日に、山形県米沢市内の福満講中で寄進したものである。鋳工は鈴木清兵衛唐好斎高正と銘刻がある。

鰐口の麻緒は長い間奉献した集落がある。町内の胄中集落である。（「集落誌」を参照してほしい）。現在のものは別で、

さらにまた特筆すべき信仰行事に、正月七日の大祭典がある。正しくは「七日堂牛王祭」であるが、通称「柳津裸祭」「七日堂参詣」また古い人達は、「柳津胴突き祭」などで親しまれている。この行事やその他霊まつりなどのことは、第七章観光に詳説したので参照されたい。

また九月堂祭もある。八月三十一日（古くは晦日）の夜にお籠と称して虚空蔵堂に祈願し、明朝帰宅するのである。このころ会津念仏衆の人たちは、九月一日各戸に念仏供養を捧げて、祖霊を供養する信心行事でいまでも現に行われている。

十三講　陰暦三月十三日虚空蔵菩薩の縁日にて参拝者は多く、殊に十三歳にあたる児女には、生涯の運勢を祈願する祭日で三大祭典の一つである。

潅仏会　陰暦四月八日これは全国の寺院で行われる事で、当寺は特に本堂内に花御堂をしつらい、誕生仏を安置し、甘茶を沸かし参詣者に自由に饗応する。

桑御篭　陰暦四月末日の夜、参詣者は養蚕家に多く、各自毎に持参し来りし桑葉を宝前に供え祈願をこめ、その霊の宿りし桑葉を持ち帰り蚕児に与え、大収繭を祈る。

五月講　陰暦五月中各信徒が、二十人・五十人と講を結んだ講員が御開帳を請い、福満虚空蔵菩薩の御利益にあずかろうとする。講中はやはり会津に最も多く結ばれ、その他県内及び遠く新潟・山形両県より参詣に来る。

盂蘭盆会　陰暦七月七日より一週間、本堂に特に祭壇を設け、各大小の戦没・或いは天災により、国のためまたは惨死せる者の精霊を祭り、香華を手向け、施餓鬼を行う。十六日の中日には流灯・花火等の行事により精霊供養をする。

九月堂　（お籠又は晦日堂ともいう）陰暦八日晦日の夜、老若男女の信者が集い、本堂内に参籠して夜を徹して信者は祈念する。

（註）〔現在は陰暦を用いず、一ケ月遅れで実施している。〕

仁　王　門

仁王は仏法を守護する夜叉神で、金剛・力士の二王が本尊の祀られてある境内入口の正門に祀られてある。二王のため仁王とも書き忿怒のお顔の恐ろしい様相を表わしている。向って右が阿像（口をあけている顔）、左が吽像で口を閉じている。狛犬もこの形で祭られてある。

日本三大虚空蔵尊の聖域なので、古くから仁王門が建立されていたことと考えられるが、いつ、どんな人達の努力があったか記録はない。『柳津秘録』の寛文五年（一六六五）九月の記録によると、この前の金剛神の由来は詳らかでない。しかしこの仁王の両面は剥落し手も臂も堕ちていて拝むにも尊さが失われていたようである。「前是金剛神由来未詳。面貌剥落、手臂亦堕」が示している。このときの住持泰州師はこの現状をみかね、檀家とも談合して新像を祭ることにした。「以故今春師至鎌倉」で、自ら鎌倉に出て彫刻を依頼した。この仏師は慶派（運慶の手法をくむ仏師）藤原朝臣加賀守という名工に依頼した。「使藤原朝臣加賀守彫焉。加賀守妙工運慶裔也」とあるのでもわかる。加賀守は誠心をこめて彫成し、立派なものが完成した。この彫像を請取るために当時の檀頭首座板屋弥右衛門、内田與三左衛門の二人がわざわざ鎌倉に上り、この二像を車にのせて警護しつつ、いく日もの旅を続けて帰られた。このことを「宗而首座板屋弥右衛門、内田与三左衛門亦至鎌倉。載車警護而帰」とみえている。来柳した仁王像はしばらく本堂に安置されたものであったろう。この新像の経費によって仁王門を修築することも不可能であった。しかし檀家の信徒はどうにかして、仁王門の改築を念じていたらしい。

寛文十一年（一六七一）仁王像が来柳して六年後に泰州師の師僧鏡山和尚の金壱両の助を得て、寛文十一年（一六七一）五月に仁王門の再建は終わった。厳かに三日間の大般若経を転読し奉り、荘厳

とおはらいを漸次行われた。そして同年七月十一日、鎌倉からお下りの新仁王像は木の香も新しい仁王門にお祭が終えられた。仝月十六日から三日間再び仁王に大般若経を転読し奉ったという。このことを秘録は、

「鏡山亦以助金壱両、五月再建仁王門、為石彦神有微恙、転読大般若、若凡三日、七月十一日安置金剛両神像於二王門、募縁道俗以成之、十六日再為石彦君大般若凡三日」

と記している。

金剛力士像を拝すると、紙礫（かみつぜ）が数多（あまた）打ちつけられてある。金剛力士はその容姿が剛傑に表現されているため、信者の虚弱者や年老いた人、病弱者はこの健康そうなお姿にあこがれ、又はすがる気も出ておがむようになった。自己の痛所を早く治りたいため、仁王にその痛所を訴える紙つぶてのなげつけ風習ができ、仁王にそれを認識させるという民間信仰での念じ方なのである。こうして仏法の守りを続けられたが、三百年余の風雨にさらされた仁王門も幾度かの修理を経ても腐朽甚しくなり、大正十四年現在の仁王門が再建された。総欅材の入母屋造りの豪華な唐破風を持つ姿が、巌の中腹に聳えているのは実に福満虚空蔵尊の御利益を象徴しているというべきであろう。この唐破風の中に一額がある。近衛文磨公親筆で「無怖畏」と経文の中の句があらわされている。

またこの仁王門の前後の石階は自然の岩石を石階にほり込んだもので珍らしい参道である。

柳津大鐘

只見川の流れにも似た清澄な響をこだまさせ、諸行無常と虚空蔵尊の帰依に浸らしていた鐘は、大同創建のころからあったろうが、文献にはじめてみえるのは、文庵和尚代の慶長十一年（一六〇六）十月十三日、時の領主蒲生秀行が若松の名匠早山定継（次）に命じて鋳造させ、これを掲げたのが初見である。しかしこの大鐘は慶長十六年（一六〇九）八月二十一日辰刻に起った大地震のために、堂塔と共に只見川に水没したが、荒明又右衛門が河中にあるのを見付けひきあげられて、またもとの鐘の音をよみがえらせた。このとき岩がころび出たものに、亀石と畳石その他がある。ところが寛永八年（一六三一）四月の大豪雨のため大洪水となり、寺の須弥壇まで水がつき、僧房や民家も流され、大鐘もまた只見川に沈没した。「僧坊民家、悉漂流鐘亦沈没」と記してある。そこで法岩和尚は同十八年（一六三八）ひろく檀家に請うて、鋳鐘して大きな鐘楼に掲げ、今までのように、朝と夕この鐘をひびかせた。このことを『柳津秘録』は、

「十八年（慶長）普請諸檀、鋳造洪鐘以揚高楼、街報晨昏」

とあるのはこれを表わしている。ところが寛永八年の沈んだ大鐘が河中にあるのをみつけた。寛文十年（一六七〇）六月二十一日渡船衆中で早速このことを時の泰州住持に知らせると大いに喜び、役夫を使い只見河中から引き上げて仏殿に納めた。この鐘の河中にあっ

たこと約四十年間である。この頃は虚空蔵堂は現地に移っているのですが、鐘楼は河畔に建っていたのである。

その後延宝七年（一六七九）十一月十四日辰刻、この巨鐘は撞く人もいないのに大いに鳴り、しばらくして再び小鳴があった。住持も僧も信徒も不思議に感じ、何事かの前兆であろうと憂え、大般若経を転読し奉って、国家の安寧と庶民の快楽を祈願したと記している。

このときから鐘楼を虚空蔵堂のある巌上に移そうと考え、延宝八年（一六八〇）閏八月に移し奉っている。そして普門品、般若心経を誦読して供養しているが、現在の鐘楼のある地点ではないようである。そののち更に鐘楼地を移している。これが現在ある大鐘楼である。その年は宝暦六年（一七五六）九月で、「鐘楼転地再建、善美倍旧」と現存の鐘楼をおもわせるにふさわしい文である。

明治十六年鐘は再鋳された。しかしこの鐘は荘厳な音を発しなかったので、明治二十二年またも改鋳した。この間僅か六年である。この改鋳のときは信者から、金・銀・銅・唐金・銅鏡・簪等が惜しげもなく寄進された。円蔵寺地内に熔鉱炉を取付けて、その熱い坩堝の中でこの品々は鐘に溶けこんでいった。寄進者は己れの寄進品が静かにみ仏の鐘と一体になる尊さとよろこびを見届けたのである。左に円蔵寺々務所発行の寄進勧進書がある。

柳津大鐘改鋳之広告

有志之者同心協力シテ柳津福満虚空蔵尊奉納之為メ明治十六年中新鋳之大鐘声音不宜ニ付、来ル旧九月一日柳津円蔵寺境内ニ於テ改鋳イタシ候条此段四方有志之信者ニ広告候也

一、大鐘口径二尺八寸ニ改鋳候事

一、本年旧九月一日午前八時吹キ初メ同日正午十二時鋳込候事

一、金銀銅唐銅鏡簪等功徳ノタメ大鏡鋳加被成度御方ハ目前ニ於テ鎔加致候間、当日迄ニ円蔵寺寺務所ヘ御持参可被下候事

一、勧化之者一切差出不申候間特別寄附之御方ハ当日迄ニ円蔵寺寺務所ヘ御持参被下度候事

明治二十二年旧八月日

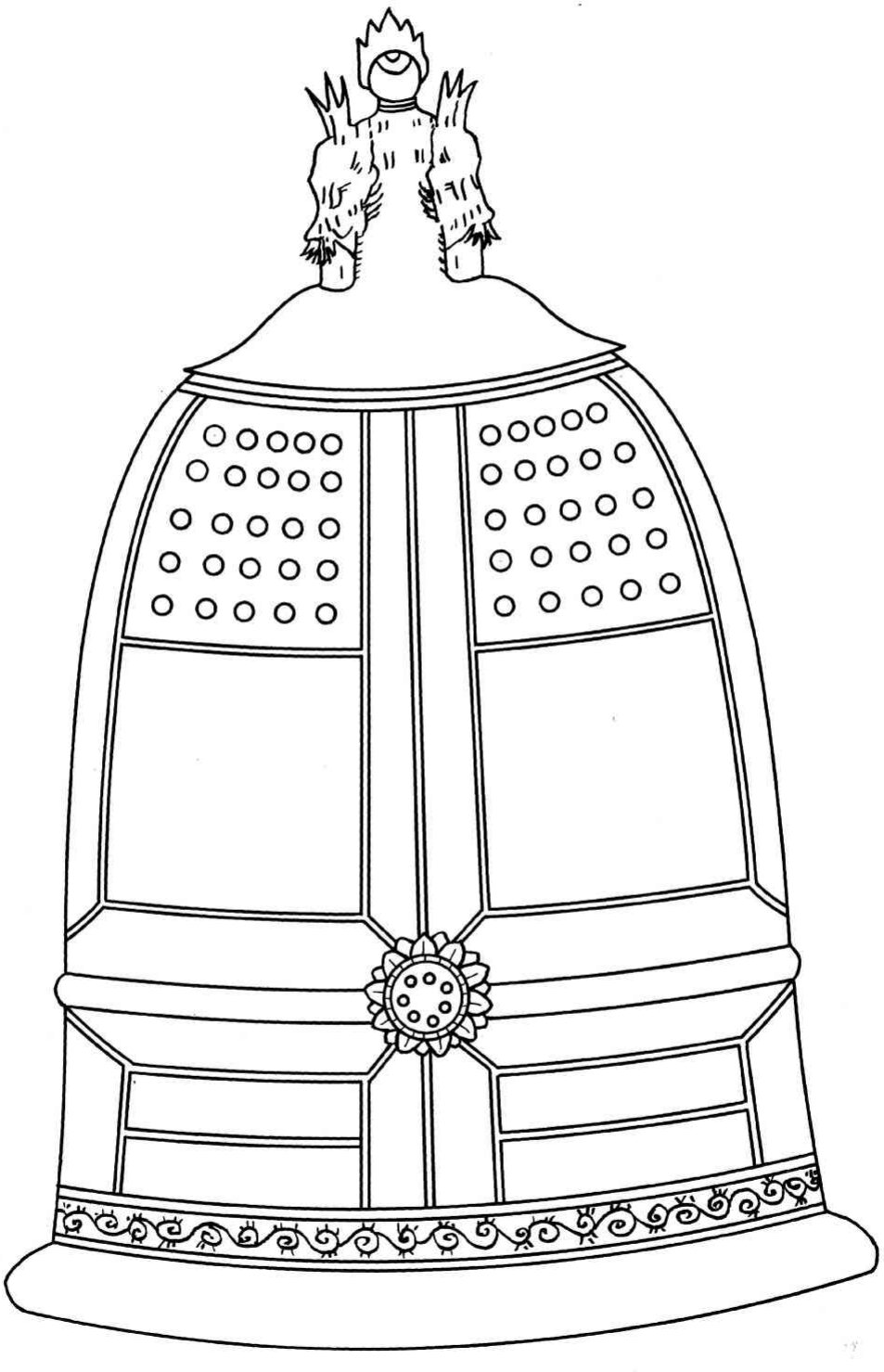
発願主　今泉直三郎

同　五十嵐長十郎

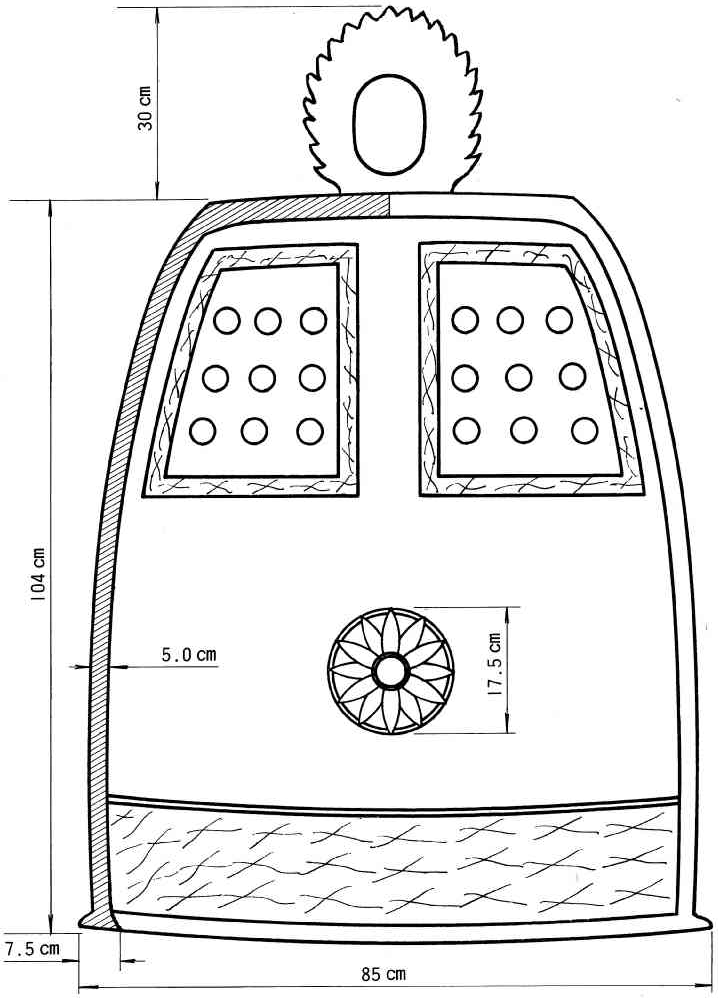
円蔵寺寺務所

としてあり、左の大鐘完成図が附されている。しかしこの浄財による鐘は、太平洋戦争に応召（供出）してしまった。尊い信者の誠心と祈りのこめられた名鐘であった。このときの初鋳は本寺・会津若松市の興徳寺へ、央鋳は円蔵寺に、終鋳は奥之院にそれぞれ納められた。次頁の鐘形はそのときのものである。

大鐘応召ののちは、しばらく晩鐘の音も絶えさびしい柳津であった。町民や信者はこのままにしておくことも出来ず、新鋳の声もお



明治22年改鋳の大鐘（応召鐘）



会津柳津福満虚空蔵尊円蔵寺鐘
佛運迎供　法輪常転
皇基鞏固　仁澤普霑
五穀豊登　萬民和楽
国土昇平　災難消除
昭和廿八癸巳歳十月吉祥日
再興当山五十八世　興宗代
発願主　奥之院　玄順
東廣

日本芸術院会員
帝室技芸員
鋳鐘並執筆
香取秀真

こり、終戦の八年後、昭和二十八年十月の吉日を選んで新鋳落慶が行われた。

この名鐘は日本芸術院会員、帝室技芸員香取秀真の鋳鐘及び執筆によって成ったものである。香取氏は日本鋳造家の当世第一人の権威者であり、この人の作品がここにあることは、日本三虚空蔵尊の一としての円蔵寺に最もふさわしいことで、文化財の優品なので永くここから響き渡る明けの鐘、暮の鐘の音で心を清め、仏徒として日本人として美しく明るい人生を歩むよう心を洗うべきである。

名鐘の刻字及び大きさを右に示しておく。

大　鰐　口

仏殿に鰐口が掲げられるのは定型なので、虚空蔵堂にも、創建時

に揚掲されたと思う。しかし天正以前のことについては、秘録にも略縁起にも記録がないので分明しない。

文献にみえるのでは、細越村猪俣美濃守が大鰐口を奉掲した旨明記してある。このときは天正十五年（一五七八）十月七日で、若松の鋳工早山彦八郎定継の作である。早山家は会津全域にその作品が遺っているように、古くからの名匠の誉高い鍛冶師である。早山銘は実に金工品に多いのである。その名匠に作らせた猪俣家は『新編会津風土記』にもみえるように、細越村の豪族なのである。これより二年前の天正十三年九月には、虚空蔵尊に「仏説如意虚空蔵菩薩陀羅尼経」などを奉納している熱烈な虚空蔵尊の信者である。猪俣氏は近江国から一族郎党を引き連れて細越村に住みついた。猪俣屋敷といわれる屋敷址は虚空蔵堂の北側裏にあり、そこに屋敷神と桜樹があったと伝えている。

このお経も鰐口も、芦名氏と伊達氏の戦った天正十七年（一五八九）以前であり、鰐口には、

「奉掛鰐口諸願成就皆令満足之所也、仍檀那細越村猪俣美濃守吉種、干時天正十五年丁亥十月七日、大工藤原氏早山彦八郎定継」

と彫付けてある。この名鰐口の音をきいた人々はどんなに驚き、その見事な鰐口にしばし見とれていたことであろう。ところが慶長十六年（一六一一）八月二十一日辰刻の大地震で堂塔は倒れ、鰐口は只見川龍宮渕に沈んでしまった。猪俣吉種は現世安穏と後世善処、子孫の繁栄を心から祈願して奉納したのに、河中に没したので、宝海上人は非常に心をいため、慶長十八年（一六一三）四月、早山定継に鰐口を再鋳せしめて虚空蔵堂に掛け奉った。しかるに延宝五年（一六七七）十一月六日、龍宮渕に沈んだ鰐口の所在がわかり、人夫によって引き揚げることができた。はたして銘刻をみると、前記願文の通りであった。慶長大地震からこれまで水中にあること、鰐口は六十八年間であった。こうして、仏徳の御利益によって再び仏前に奉納されたことは実にめでたいことなのである。

現在の大鰐口は、明治二十二年丑六月十三日寄進されたもので、山形県米沢市内の米沢講中の寄進で、鋳工は鈴木清兵衛と唐好斎高正の合作の銘刻がある。また鰐口用大綱は永年西山地区、胄中惣村中で寄進していたが、終戦後、麻作りをやめたので中絶している。

魚　淵（国指定・天然記念物）

柳津福満虚空蔵尊岩下、只見川の渕に「ウグイ」の群生しているところである。ウグイは群棲しない習性を持っているのに、数万のウグイがみられるということは、長い歴史の経過がこれを物語っている。大同（八〇六―九）の徳一大師が虚空蔵堂建造のときの木片が、川におちて魚と化したという信仰伝承のある霊魚なのである。そのことから殺生を慎しみ禁漁し続けたので、ウグイも安住の渕を体得したためでなかろうか。遊人がこの渕の岩上から投げ与える餌に何万のウグイの群集魚をみることができるのは、奇観ともいうべきで、柳津のみの特異な現象である。

享保十二年（一七一七）八月、会津藩主松平正容は鼎宗和尚と肝煎に命を出し、「出倉村下流六町。両岸禁殺生」とした。これが魚渕禁漁を制限した最初なのである。これより古く慶長十六年（一六一一）蒲生二代領主秀行は、ウグイを捕えるため、安久津村下から毒もみをかけ、自分は観月橋のほとりでそれを眺めていたが、ウグイは奥深く沈棲して他魚が川面の色をかえるほど浮上したのに、ウグイは一匹も殺すことができなかったと記録されている。このたりで、翌年秀行はこの殺生日近くに死亡したという。

こうした福満虚空蔵尊の使い魚として、保護してきた柳津の人及び遊人の心の形象化の結果としてこの奇蹟をつくり上げたことである。殺生を禁じた信仰の柳津は、生卵を食べることをよく慎んできた。今でもこれを守っている人は多い。しかし若人はこの禁をゆるめているともみられている。ウグイは群棲を好まない習性をもっている。文部省はこの珍らしいウグイ群棲を全国稀有のこととして保護している。そしてここを禁漁区とし、昭和十五年七月十二日国は天然記念物に指定した。

魚渕を中心として、只見川の禁漁区は、

上流　七五〇メートル
下流　四〇〇メートル
銀山川、金洗川　各二〇〇メートル

この群魚こそは、柳津の観光の代表的文化財である。

三　重　塔

円蔵寺には三重塔があった。塔跡は「千階下岩上」と記録してあるので、河畔にあったのか、内田屋と小川屋の北の段丘であったか不明である。明徳元年（一三九〇）に宝塔供養をしたとみえるので、このとき創建と考えられる。その後二十四年後の応永二十一年には塔修理をしているのである。

ところが永正十三年（一五一六）三月二十八日、火災のために堂・塔・門が跡かたもなく失せてしまった。塔は三重でその屋根の頂上には、露台・伏鉢・請花・九輪・水煙・龍車・宝珠と実に美しい塔であったらしい。朝霧にみえかくれし、夕陽に映える姿は柳津円蔵寺・虚空蔵尊の仏徳を象徴するかのようであったろう。実に惜しいことをしたのである。檀家はこの塔を忘れることができなかった。塔の再建を考えて天文四年（一三三五）に計画をしたことはあるが、経費その他の事由でとうとう塔の工事をみることができなかった。

塔は仏舎利を祭り、釈迦の姿と心に接する仏徒信者の祈願道場なのである。柳津にこれがないのま実に淋しいことであった。再建の議は再度おこってその工事をはじめた。これが寛政十一年（一七九九）である。時の住持は璋峰和尚であった。永正火災から約二八三年の歳月が経った。このとき璋峰和尚は観世音に深く帰依し、聖観音を一まず三重塔に奉安しようとして、自から西国三十三観音巡拝をして、一ケ所から土砂を少量づつ集めて持ち帰り、これを境内に

納めた。後この聖観音は塔後に別に観音堂を作り安置し奉って、多くの人々が参詣するようになった。盆地（内会津）の会津三十三観音巡りの人が、最後に「ブチ納メ」として同行者全員が必ず柳津のこの観音に参詣した。会津と西国の両三十三観音を巡礼したと等しい御利益をうけると信じたからで、今でもこの信仰行事は続いているのである。

三重塔は文化五年（一八〇八）に落慶して、盛大な塔供養が行われた。このときは、本坊と虚空蔵堂の中間に建立されたことが円蔵寺に現存する絵図によって知ることができる。永正の火災から約二九三年目のことで、高台にこの美しい三重塔を仰いだ当時の人々はどんなにおどろきと有難さを感得したことであろう。円蔵寺はまだ内田・小川屋敷の北である。このときの庶民の声の記録をみることができないのは残念である。中心柱が厳上に据えられて相輪まで続いていたといわれている。この塔が惜しいことに、文政元年（一八一八）六月十五日午前の火災で堂塔と六坊、その他民家一〇六軒が紅焔の中に消えてしまった。三重塔は僅か新築落慶から前後十一ケ年で姿はみることができず、現在その礎石らしいものをみるだけである。

この塔の美しさ、寺・堂との調和美を考えると、円蔵寺境内はすばらしく荘厳であったと想像するほかはない。

本堂南参道近くには、信仰者の献納灯籠が並列して奉納されているが、その中の二灯籠は金灯籠で左のような陽銘がある。

その一灯は、

「奥州会津封河沼郡持寄村

齋藤文六盛家

正徳六年（一七一六）龍集丙甲夏吉辰」

他の一灯は、塔寺村住鋳物師の作でこの一流が有名な「塔寺テドリ」を鋳た鍛冶師であろう。

「霊厳禅刹香集梵宮人捨財宝地肇灯篭借大治手鎔金鋳銅戮貧女力洗両磨風春々含識漸々啓蒙光昭遍照八面玲瓏住持伝法沙門観鼎宗謹銘

宝永七龍集庚寅九月吉祥日

為国家安全繁栄之奉寄附之者也

武州江戸住功徳　重矩

江州栗本郡矢橋村産会津河沼郡塔寺住

芝田儀左衛門尉藤原朝臣俊光作」

また他の一行の陽鋳文は左の通り。

霊厳山灯籠記

斎藤氏某当郡持寄村之産也一日訪予於山中日光人意休寛有有願志而遺命於不肖日於斯異蒙許可照幽冥乎予喜其言輙應諾矣於是正徳六年龍集丙申仲夏吉辰借午鳧民鋳造灯籠一基以旌其功矣蓋其為願也専祈国家清寧庶民和楽過則薦於特恒冥福現則添於子孫嘉運加之與三界含識同到清浄円満之寛位矣且其遺誡日凡後世称我孫者保護焉而應如玉矣若纔視損壊則速加修補庶幾斯燈永不滅矣懿哉言也吾

曽聞之以斯深心報塁者夫斯謂之乎嗚呼花晨月夕與香集界接於其光
洗雨磨風與宝珠岩等於其壽者豈啻憶萬年乎哉
奥州路会津河沼郡持寄村
齋藤文六盛家
江州栗本郡矢橋郷産
会津河沼郡塔寺村之住
治工　芝田儀左衛門尉
藤原朝臣俊光　作
武州江戸神田之住
小工　田中長右衛門尉
現住　富山鼎宗東観　謹記
永久油料　当住納之

開運撫牛

我等の四周の方位は、何れも人生と深いかかわりあいを持つものと信じた人があり、更に八方に神仏を配して守本尊とした。長い間にこの方面に当てられた神仏を信仰して、開運の加護を蒙りたいと念願していた。丑寅の方位には虚空蔵菩薩を祭り、衆生の希望を満足せしめるため、その自在力に結縁した。また柳津虚空蔵堂を大同の昔に建築するとき、その用材は殆んど牛の背と力によって運ばれて御堂は建立されたと言われているのである。こうして虚空蔵尊と牛とは実に深い縁因を持っている。

堂前に石の寝牛が祭られてある。戦争前は大きな金銅製の撫牛があったが、応召して現在は失ってしまったが、この牛は参詣者の手で幾万遍と撫でられて、光り輝いていたのであった。水舎で口をすすぎ、身を浄めた善男善女はまず石の牛に祈りをこめて撫でて、牛をとおして本尊虚空蔵尊と結縁し、そして菊光堂に入り本尊を拝んでいる。

撫牛の頂上に大黒天を勧請したこともある。これは虚空蔵尊が大黒天の本地仏のためで、庶衆の楽欲に随って普門示現されるとの信仰からである。柳津虚空蔵堂前のものは会津随一の著名な撫牛である。

なおこの石撫牛には、宝永七年（一七一〇）九月吉日、住持伝法沙門の陰刻がある。

この石彫りによっても、当時（文政期）欅の大木が柳津近くに少なかったこと、またこの搬出と運搬に只見川は勿論、牛の力によったことも想像に難くない。誕生が丑・寅にあたる人が、守り本尊虚空蔵尊を拝し、この堂の荘大さの影に牛の働いていることを忘れる人は少ないことであろう。撫牛に心をよせる人の多いのもそのためである。

丑・寅年生れの守本尊

この年の一生の守本尊は虚空蔵菩薩である。

丑年生れの人よ。丑はもともとみ仏のお使いといわれ、性質は温和でその乳は人間にも大切なものである。また牛は物事に動せ

ず、忠実で力強く注意深く最後までやり通すたくましい性質をもっている。丑年生れの人に成功者の多いのも、こうした心で努力した累積のためであろう。よい星の下に生まれた人である。

寅年生れの人よ。虎は野生で精悍。何物も恐れず自分の目的を果たす。千里行って千里帰り、猛虎一たび吠えればその一声でもろもろの悪鬼を払うという。虚空蔵菩薩は、この対蹠的な寅をよく愛される。この威力、このエネルギッシュをもってこそ、目的に向ってバイタリティを燃やして、努力するので成功者が少なくないといわれている。よい運勢のもとに生れた人である。

柳津の微小細工彫刻

わが町には古くから微小細工のすぐれた技術が伝統的に伝わっている。微小細工とは優れた技法によって、繊細精巧な彫刻をすることである。例えば五ミリメートルに満たない籾殻（ぬかの皮）を光背に見たてて一仏像とするようなものである。伝承によると大同（八〇六）の頃からあったともいわれているが、記録として見ることは出来ない。しかし天正（一五七三）以後からでないかと思われる。それにしても四〇〇年以上の歴史を経ているのである。『柳津秘録』によると左の文がみえている。

「天正六年（一五七八）六月、師之江州安土、謁信長、初公毎歳僧遣、祈願薩埵道路熟知、目日虚空蔵坊、嘗将降石階、拾得胡桃皮半片、視之、内安小仏四躯、見師告之、師之作歌祝之曰、安米我志多於天爾久留美乃不多波弥天與毛乃久爾久爾志多以来末奈利僧帰告公、公喜歎美云云」

とある。円蔵寺住持富山西堂和尚の時で、近江安土城の織田信長に謁して帰る途中の石階で拾ったのが胡桃（くるみ）の殻に納められた四仏嵌入（がんにゅう）のみ仏、それも虚空蔵菩薩であった。実に不思議と思われ、虚空蔵尊の御仏縁御利益として、富山西堂和尚はよろこびのあまり祝いの歌を作った。

「あめがしたお手にくるみのふたはねて
　　よものくにぐにしたえくまなり」

と信長公の徳望が天が下に潤うているめでたい意を詠まれたものである。

やがて富山西堂和尚は、虚空蔵尊に因（ちな）んだこの微小細工を日本三所の福満虚空蔵尊の柳津で、その技法を伝え製作されたものと考えられる。

それから今日まで四〇〇年間、柳津にはこの微小細工師が絶えることなく続いてきた。他郷の人々がこの微小細工の仏像を虚空蔵尊の御守護として、また美術品として求めて帰る人が少くない。明治末期からの彫刻師を挙げてみると、月本坊を継承している月本家の月本墨仙師（本名宗久）は優秀な技をもち、作品も遺っている。また現存者では門前町の長谷川栄吉師も伝統の技をもち、幾人かの弟子にその妙技を教授したこともある。更に現在名彫刻を次々と発表

されている人に、岩坂町の金坂富仙師（本名富雄）がある。柳津の南の安久津に生れ、若いとき苦難を続けたこともあったが、そのためか現在は稀に見る微小彫刻師として、世界的栄誉を担っている。昭和四十七年米国シカゴ市彫刻博物館に「銀杏入七福神」を出品して入選し、同館の名誉会員に推挙され、ミクロ芸術証書をその証として授与されたのである。

国内でもこの俊腕を幾度となくテレビ放送をしてその技を賞揚し、週刊誌・月刊ふくしま・旅行朝日・中学一年コース等々多くのマスコミによって報道されている。現在は五男富幸氏にその技倆を継承中で、僅か一ケ年そこそこですばらしい作品を発表するまでに至っているのは、さすが父の血の強い影響とおもわれる。こうした父子の作品は、虚空蔵尊前において開眼供養を行い、信者の希望によって頒布されているのである。

この微小細工を承けて祈願すると、み仏の御利益が実にあらたかであるとの礼状も多い。

金坂富仙師は世界平和を祈って、アメリカ合衆国大統領と、ソ連首相に謹呈することが念願であるとは、芸術家らしい美しい精神である。

こうして柳津虚空蔵尊では、誰かがこの技法を継いで微小細工の絶えたことがなかった。近代になっても月本旅館の月本墨仙（月本宗久氏）が、また大正から昭和初期までは長谷川栄吉氏や長谷川民一郎氏などがその技を伝承して、いろいろな作品を遺している。また現在は岩坂町金坂富仙（富雄）氏が、すばらしい微細工彫刻をやっている。例えば、ゴマ粒入二福神、クルミの実入二福神、クルミの実入守本尊や同じく光背付虚空蔵菩薩尊など実に見事な作品の数々が作られ、虚空蔵尊参詣の人々に分与されている。特に先年は、米国シカゴ市にある国際彫刻博物館に出品した銀杏実入七福神は優秀な成績で入選し、日本人の芸術彫刻に対する価値を驚嘆せしめ、同館のミクロ芸術会員に推薦された。この微小細工は日本的にも有名で、マスコミは十回近くこれを県内、全国に紹介している。金坂氏はすでに秩父宮妃殿下に献上、また草月流勅使河原蒼風氏にも贈呈したという。

この金坂富仙氏は今後は、世界平和を祈念して、米国大統領とソ連首相に、仏像微細工を贈呈して、自分の真意を理解し実現して貰うことがその仕事の証（あか）しにしたいと、いまもなおこの彫刻にいそしんでいる。

また三男金坂富幸氏が、ヤングとしてこの技術を父から伝授されている。父の話によると実に器用さがあり、年を重ねるにつれ私のものを完全に伝授することが可能であるという。柳津町としても、このことは実にほほ笑ましいというべきである。

柳津円蔵寺を中心とした文学

《漢　詩》

宿　柳　津　　頼　三樹

北州名勝是禅関　寺在巉巌萬畳湾
夜枕夢清連岸水　暮鐘聲落半空山。

柳津真景　道幸春雨

愛樹泝来曽此留　千年霊地三柳丘
菊光堂高巌上聳　只見川清乙字流
両蛇睨辺玄亀浮　兜對鳥帽畳倚舟
明星映石巨足顕　宝珠照水群魚游
博士山遥暁雲掩　飯谷嶽近暮雲収
烟霞依稀花爛熳　風月虚空気清幽
渓聲不尽廣長舌　洗却人間無限愁。

柳津虚空蔵尊　武田梅仙

巍々高堂聳半天　入門心静意先遷
偶看果実是疑薬　又過樵翁即思仙
只見川頭忘俗気　円蔵寺内絶塵縁
老僧談話皆神妙　吾詣此山又翼年。

只見川渡舟　大庭松斎

乱山中断大江開　山色水光碧於苔
西南一望水窮処　風帆忽出樹梢来。

遊柳津　樋口蒼龍

暮色蒼々雲如収　深渕時見大魚浮
涼風一陣天如水　人倚柳津明月楼。

霊巌山秋月　平元徳松

三五雲晴眼界寛　月離松影夜光寒
霊巌山畔臨流水　一様氷輪上下看。

遊柳津有作　松里宗川茂哉

霊地名喪是柳津　風光雄美也驚人
刻成尊像尤無比　銀杏殻中七福人。

柳津霊巌山菊光堂　高木輝堂

感徳千年仏徳尊　名藍占此別乾坤
几前現出好山水　張觸吟必役我魂。

遊柳津有旧作　佐瀬三餘

巉巌高架梵王宮　探勝人吟在此中
東岸桜花西岸柳　羨他小艇棹春風。

詠柳津　虎哉

四面高山囲堂山　一渓流水遶仏前
看々虚空無尽境　日日往詣幾万千。

同　韜谷直人

順流易也逆流難　萬仞崕撮手看
直以虚空為坐処　黒漫々池白漫々。

同　貞山

萬嶽千山清洋身　霊巌百尺是天真
檻前下見魚渕水　弘誓船浮楊柳津。

同　黙水

山雲低処峯初秀　円月落時人自眠

蔵景埋楼煙雨裏　寺前数詣茂林泉
再遊此地旧因縁　維石巌々堂宇前
葉底花開菩薩面　村端月朗祖師禅
白雲深処僧帰寺　碧水通時魚躍渕
風物万般何日尽　虚空蔵裏一山川。

丁酉仲冬　謁円蔵寺観景生情　徐晏波

羊腸宛転路嵯峨　勝地徐来景象嘉
殿宇虚空知仏刹　楼台飄渺恐仙家
箋層松嶺鋪銀雪　萬畳雲山釀彩霞
内澗泉光如玉色　外川水影似桃花
春風秋月情何限　暮詠朝吟興不賒
若使禅関能許我　願将棲隠選塵譁。

四　日　堂　春雨　瓢阿弥

大般若経大般若　満堂聲溢大般若
善男善女礼拝群　賽銭引闔多請託
忽看天上護符飜　三百有余飛燕雀
群衆喧噪競招拾　裂衣折簪不敢愕
或攀鐘縄懸半空　頗似蛛捕絲飛蛸
又見俄然起波涛　恰如争餌萬魚躍
午後雪晴人去尽　香煙散乱雲漠々。

七　日　堂　同　人

玉屑繽紛夜更寒　清鐘三回報開坦
争先攀凍階人皆裸体　英才之聲響林端
直洒霊泉集堂内　叫喚跳蹈千群隊
体温漸蒸汗淋漓　群中時々投雪塊
英才英才聲益譁　跨梁蹴棟競相誇
忽疑鯨飜起海嘯　又訝雷発夷蹶車
屋上頓減幾寸雪　可知信心勝寒烈
牛王飛散萬衆争　拾得一枝互狂絶
君不見一心不乱　水火亦恂□□□
況獰鷲猛獅偶遭逢

明　星　水　伝　空海

霊巌霊境明星水　水面浮光常湛然
一掬都除六塵垢　生来必有此因縁。

『和　歌』

伏見宮文秀女王殿下

流れての世にもたえせじ只見川
　ただみほとけの深きちかひは

同　人

円(まど)かにも蔵まる月の影みれば
　心にさわぐ浮雲もなし

長谷川美材

世の人の迷の夢やさますらん

法の御山の入相のかね
八汐紅葉を　　長谷川美材

御仏の恵のつゆやかかるらん
老木の紅葉色も世に似ず
宮城盛至

糸滝のたきの白糸よるよるは
月の光のかげ結ぶらん
長谷川美材

手にくめば月の影さへ宿り来て
夏なお寒き岩清水かな
芭蕉翁

これやこの往来もしげき世の中の
橋の音さへ断へぬいとなみ
長谷川美材

み仏の恵も深きこの渕に
あそぶ魚こそたのしかるらん
同　人

月と日と光り争う池の水
すまん限りはわれありと知て
長谷川美材

その昔いかなる神かをりたたし
この御姿を刻みましけん
長谷川美材

み仏の庭のながめとおかたれる
八つの大石見れとあかぬかも
同　人

立帰る同じ流れにわれも亦
ただみのすえのありの川波
芭蕉庵桃青

朝な夕なしづ心なく只見川
世のいとなみを渡る柴舟
霊岩山秋水　　長谷川美材

法の山木の間にすめる月見れば
こころの雲も晴れてさやけき
逸　林

棹させばしばしがほとにつく舟の
よる波きよき夕月夜かな
対雲閣主人

この山は美しき山うまし山
空に月あり松にかぜあり
対雲閣主人

更科は月の名所しかはあれど
我が柳津の秋には如かじ
堂森春霞　　逸　林

春かすみかすみにけりな咲花も

みどりの松も色わかぬまで

奥之院晩鐘

今日は過ぎあすは知られぬ世の中に
　　み法をつくる入相の鐘

月光寺糸滝　　読人しらず

雲の横かすみのたてた織り終へて
　　雪にて晒すたきの白いと

柳津の春　　柳渓山人

風流士が花を見まくは此里の
　　春の弥生に来るにしあるべし

柳津の秋　　同　人

名所はさわにあはにあれども此里の
　　秋の月夜にしくべきもなし

飯谷山初雪　　逸　林

けさみれば宵の寒さのいちじろく
　　飯谷の山にふれる白雪

堂森春霞　　在　経

松杉のこずえもはるはくれなるに
　　にほうやはなの霞むなるらん

魚渕清涼　　正三位供秀

魚渕にひれふるかずもみゆるとて
　　そこゆく水の色もすみけり

霊厳秋月　　基　資

伊つくしきいわほの露に宿り来て
　　かげも世に似ぬ秋の夜の月

戸原眺望　　正三位定肖

夕日さす戸原にかよう山かりが
　　こゆべき坂の道いそぐらむ

飯谷初雪　　公　遂

いまいく日ありて里にもふりつまむ
　　飯谷の峯の今朝のはつゆき

只見渡舟　　隆　光

つれかかる心しのばや青柳の
　　いとによりても舟はひくらむ

中橋夕照　　資　文

ひきわたる駒の足音(あがき)も急ぐ見ゆ
　　夕日てらせり里の中橋

奥院晩鐘　　公　燕

奥山はみのりの庭のさびしさも
　　おもひやらるる入相のかね

下田落雁　　右近将藤原基延

詠めやる下田はるかに幾つらか
　　ともうちむれて落る雁かね

巻村時雨　　忠　能

ときはにて亀もかはらぬ巻村は
　　時雨にのみや冬を知るらむ

月光寺糸滝　　公　弘

そま負いていつ山ひとのおりぬらん
たえずも落るたきの白糸

《俳　句》

菊光堂に登りて

欄干をぬふ青東風のわたりかな　好　文
友禅の袖も匂ふや花の寺　柳　渓
花の香に鐘聞ゆなり奥之院　好　文
糸瀧に月のからまる光りかな　仝　人
蛇柳の玉やみたれて妹背山　三千風
仙台三蛇柳の玉や乱れて妹背石　仝　人
川上やこの川しもも月の友　はせを
花ちるや菊光寺の鐘の音　三　餘
真清水や忘れた枝に二度掬みぬ　仝　人
涼しさやあら瀬にあさる魚の振　好　文
鶯を左右にきくや瑞光寺　仝　人
おばしまに高髷見ゆる秋の月　逸　林

柳　津　漫　吟　　米山堂主人

舟待や暑さを流す只見川
立ならぶ岩もかかみや秋の月
雪ふりてそも飯谷の風情かな
日に倦まぬ戸原の萩のさかり哉
けしき富牧村山のしぐれ哉
雁なくやここは下田と真しくら
藤咲きて水底清し只見川
尊さに先忘れたる書寝かな
静かさに露もこぼさぬ若葉かな

《其の他》

秋ぞゆかしき

秋ぞゆかしき霊巌山心もさゆる夜半の月、見に来る人の足音はパットやんではアレ松虫のまたも鳴く。

夜の花

山の端の月は朧ろに春の夜の墨絵に似たる諏訪の森人目もしげき中橋に隔てられつつ帰る雁法の灯のチラチラと袂にちるや夜の花。

ここは名所

ここは名所さまざまの中に名高き八汐の紅葉人もよりくる糸滝やゆきてかえらぬ川水に昔ながらに映れるはコチャコチャ小巻の山じゃない。

霊岩山秋月

雪は落花と疑われ落花は雪と疑われ柴の戸たたく小夜嵐
友や訪ひ来と疑はれ松風清く空青き秋の月夜の霊岩山須

磨の関かとうたがはれ。

柳津の里

柳津の里には名所がござる一に本堂二に奥之院三に山居寺四に諏訪神社中の橋には只見の渡舟渡りに舟とは嬉しいけれど只見といふ字か氣にくはぬ。

柳津の四季

春は花いざや御堂の前かけて庫裡の遠近咲き匂ふ色香に狂ふ蝶々につれて浮るる人心沈めがほにもつく鐘の響やいづこ奥之院寝る間も夏の短か夜を涼みにふかす只見川松ふく風のそよそよと秋の月見る霊巌山岩間に垂るる糸瀧の眺めゆかしき月光寺何との山の端にけさ珍らしく降る雪の色も風情もおもしろし

柳津繁昌壮士唄

仰げば高し飯谷山望めば清し只見川水明媚の柳津に立たせ給へる御仏は日本三所の随一と世にも知られてその名さへ福満虚空蔵大菩薩霊験ことにいちじるしく山なす日日の参詣は西は九州四国より北は千島のはてまでもまるらぬ人こそなかりけれ其又名所のかずかずは霊巌山の秋の月奥之院の晩鐘や魚渕糸滝中の橋渡りて君に大清水契久しき亀石や女蛇男蛇兜に畳石総て八石十二景げにうるはしき山水の中に立せる御仏の栄えは万歳万々歳繁昌繁昌大繁昌柳津大繁昌。

大津絵

色は緑の柳津に、たたせ給うは霊巌山、下に流るる只見川、恵みも深き魚渕や、万代かけて亀石に、契りを結ぶ円蔵寺、御堂に照り添う月の影、遠近人の絶間なく、願い事菩薩は納受ましまさん、朝夕はげみし甲斐ありて、開運出世の身となりぬ。

岩代柳津福満虚空蔵大菩薩和讃

帰命頂礼岩代の　福満虚空蔵大菩薩
平城天皇御在位の　大同二年のその昔
弘法大師は秘法もて　唐の霊木三断し
祈りて海に投ぜらる　流れうつりてその一ツ
水影浄き只見川　有縁の霊地山の辺に
光りかがやき漂えり　大師の巡錫まつべしと
大師訪れ錫をとめ　心をこめてぞ彫り給う
ここに会津は柳津の　禅閣名刹円蔵寺
菊光の御紋かしこくも　その名もゆかし菊光堂
一千一百有余年　おわしましまし大菩薩
世々の帝王武将がた　長幼貴賤の区別なく
只み仏の誓いをば　仰ぐもうれしよろこばし
福満虚空蔵大菩薩　南無虚空蔵大菩薩

円蔵寺（柳津）

霊巌山　臨済宗

大同二年（八〇七）徳一大師創建と伝え、一千百六十有余年の歴史輝く会津はいうに及ばず、北関東から新潟・山形・宮城三県に信者を持つ名刹である。開山以来至徳二年（一三八五）まで法相宗を嗣いできたが、至徳のはじめ伝・徳一の裔、義乗が霊夢によって、若松の興徳寺第三世大圭に嗣法して、臨済宗に改宗した。そのため大圭は中興開山とも称し、この木像は奥之院に安置されている。円蔵寺と虚空蔵尊は会津歴代の領主の信仰が深く、芦名家のころは寺産が多分にあった。しかし天災・人災があり、その興亡は虚空蔵尊も奥之院も同じ歴史を繰り返してきた。

天正十八年（一五九〇）八月十日、豊臣秀吉が会津に下向し本寺興徳寺で政務を司ったとき、その子秀次から二〇〇石、年貢定銭一〇二貫八四六文也の寄進があった。

その文書は現存しているが、左のようである。

已　上

為柳津領二百石、並当所屋地子令寄進訖、全被寺納無由断建立尤候。猶羽柴忠三郎（蒲生氏郷）方之申渡候。謹言。

天正十八年九月三日　　（豊臣）秀次　花押

柳津本願

が保存されている。その後に蒲生氏も二〇〇石を寄進している。その文書に、

已　上

為柳津領二百石、並当所屋地子、近年納米分永代令寄進候、今度御検地屋地子出分等、對坊中地下令免除者也。

天正十八年九月朔日　　（蒲生）氏郷判

楊津本願

またその子秀行も左のように寄進した。

已　上

為楊津領二百石、永代寄進訖、並当所屋敷方加地子出分、對坊中地下令免除者也。

慶長六年十月廿二日　　（蒲生）秀行判

楊津　別当坊

また加藤嘉明の寄進状もある。

為楊津領知行二百石、如先規全可有寺納者也。

寛永五年十月十八日　　加藤左馬助嘉明判

楊津円蔵寺

とみえている。

慶長十六年の大地震の被害の惨状については、別に虚空蔵尊に記したのでここでは省くが、この災禍の後に蒲生家は、臨済宗を改めて、若松府下の真言宗の僧四人に命じて輪番に寺務を掌らしめた。翌十七年の小地震でも、寺の後の山崩れがあったが、禅僧一人はその傍にいても無事であったと『会津正統記』は伝えている。

また、円蔵寺六坊があった。その一坊毎に更に六坊を掌って、三十六坊があり、柳津の地は坊中で家並が櫛の歯のようになっていたことであろう。六坊とは、柳本坊・杉本坊・槻本坊（月本坊）・岡本坊・桜本坊・塔坊で、この六坊は文化四年の書上帳には遺っている。また三十六坊の中では、衰えたものは附近に移されて寺となっている。正光坊は椿村正光寺に、松徳坊は小ノ川村正徳寺などで、当時すでに二十七坊は無跡となっていて左の名称で呼ばれていた。

般若坊、大日坊、一王坊、不動坊、知長坊、明学坊、龍学坊、滝本坊、小学坊、定林坊、法光坊、弥勒坊、安貞坊、中禅坊、大杉坊、法光坊、高林坊、長雲坊、月祥坊、大楽坊、吉祥坊、祐心坊、妙雲坊、西光坊、円学坊、塔善坊、観音坊、等である。六坊は妻帯をして専ら仏殿の洒掃にあたって勤行した。

六坊のうちで、古文書の所蔵するところもある。塔之坊、桜本坊のものを左に写す。

塔之坊（一通）

去秋頓入宝前、参籠被抽幡幟成就之巻数守、並五明紅燭送給、目出欣然之至候。弥武運長久之懇祈任入候、恐々謹言。

二月十四日　　景勝　判

塔　之　坊

桜坊には現在多くの古文書がある。

桜本坊（三通）

(一)　当月番之開帳、鳥目進之候、於御宝前、能々祈念頼入候、尚吉事重而恐々謹言。

六月廿三日　　止々斎（註、芦名盛氏なり）

桜　本　坊

(二)　自佐竹之使御造作に候共、一宿之儀頼入候、委自出雲所可申越候、早々恐々謹言。

八月五日　　盛隆　判

桜　本　坊

(三)　態用一行候、当寺衆徒中、分沼より畳百三十状被越候、其内少数候共不苦候、早々相越候様に可有之候、吉事重而恐々謹言。

六月廿八日　　政宗　判

桜　本　坊

以上が文化五年（一八〇八）に書き上げられたものである。このほか、相馬地方と桜本坊とは古くから特別な親密の関係にあり、また参詣来柳の際の宿泊は必ず桜本坊と定まっていたことを証する文書も現存している。

その他にも、桜本家に数十通の文書が手入よく整備されている。

こうして歴代の会津領主及び藩主は、福満虚空蔵尊の信仰が実に深かったのである。以下天保年間に編集した柳津秘録と円蔵寺版の『福満虚空蔵大菩薩略縁起』によってその大略の歴史的経過を述べておく。大同二年（八〇七）徳一開山して至徳二年（一三八五）まで五七八年間は法相宗を継承した。ところが至徳二年に寺内の小問題があったものらしく、若松興徳寺の大圭和尚を呼び、当時の別当義乗がその法を嗣ぎ改宗して臨済宗となった。これが禅の始めであり大圭和尚を中興の僧と称し、奥之院にはこの大圭の木像を至徳三年（一三八六）に祭ったのである。次の金蔵長老まで二世は臨済宗であり、金蔵長老は義乗和尚でこの僧は非常な観音信仰者で、応永元年（一三九四）に観音の画像を描き師の大圭に賛を依頼しているその賛に「人人観世音、心外莫追尋、如月眉間鑑、那方不照臨」と認めているほどである。その後慶長十六年（一六一一）まで七世、約八十余年は記録を失い不明である。

応永二十一年（一四一四）には宝塔供養をし、延徳三年（一四九一）仏殿を修理し、永正十三年（一五一六）三月二十八日には堂・塔・門とも火災で焼失した。享禄四年（一五三一）には、楊津本供養をして千部読経をし、天文四年（一五三五）には塔及び民家が災をうけた。弘治三年（一五五七）に曹洞宗秀均は霊験記を作成し、過去の歴史を記述している。ところが元亀（一五七〇―七二）のころ本堂の荒廃が甚しかったので、時の別当厚源和尚は、普く勧進募縁の結果、大堂を新築した。柱に金銀を塗り、其縁に美しく彩色し、輪魚は日に輝いて華やかだったので、人皆この御堂を日光堂と称賛した。このことは『旧事雑考』にも載せられた。このあとの宗薫まで曹洞宗であった。

天正七年（一五七九）三月七日には民家の失火により、本堂及び本坊、更に多数の民家が焼亡、惜しくも日光堂は十年そこそこで灰になって、信者から惜しまれた。芦名盛氏は深く尊信した本堂の焼失に財を寄進して再建せしめることとした。この天正十二年（一五八四）には、松本太郎の反逆事件がおきた。このときの住持は富山西堂で、この僧は打月斎と称し、松本太郎の叔父にあたる人だったので、このときもまた天正十七年の政宗会津芦名を討つときも戦禍をまぬかれたのである。この代に寺を再建して、霊巌山円蔵寺といい、ここに菊光仏を祭った。これが菊光堂の創始である。のち寺名

を一時蓮蔵寺と改めたとあるが、この名は永続しなかった。また天正十二年（一五八四）四月十一日に楊津は火事にあう。こうした翌十三年に細越村猪俣美濃守吉種は、現世安穏と子孫繁栄を祈って、「仏説如意虚空蔵菩薩陀羅尼経」を奉納している。その末尾願文をみると、

「奉寄進虚空蔵経板起処現世安穏後生善処別子孫繁昌故也。願主奥州会津稲川庄細越村住人猪俣美濃守良種並作者山伏泉蔵房。時天正十三年乙酉九月吉日」

とある。鰐口銘は吉種とあるが、どちらも「ヨシ」と発音するので同人であろうと思われる。この人が天正十五年には大鰐口を寄進しているのである。またこの天正十五年（一五八七）上杉景勝は、新発田治長を征って大勝利を博したのは、虚空蔵尊の御利益として、越前青石をもって三十五仏を刻み、柳津に送り届けている。この三十五仏は慶長十六年の大地震に本堂と共に龍宮渕に沈没したが、内五躯だけを砂中から拾いあげて本堂内に安置し奉った。

天正十八年（一五九〇）九月、蒲生氏郷から采地を賜わった。文禄三年（一五九四）六月十七日大雨大洪水となり、舞台及び大石の名のあるもの七箇が流失して、両岸にはおそろしい鯨波がせまったという。越えて慶長十六年（一六一一）七月（一説に五月十四日）に蒲生秀行は遊戯と称して来柳し、只見河畔の出倉村家ノ下から諸毒を流して魚を採ろうとした。当時この毒もみのことを「根ヲ踏ム」といった。この毒物は胡桃の皮、山椒、柿渋、牛馬の糞を混入してよく混ぜ合せ、それをおびただしい悪芥と共に、人生二〇〇人余を使って流させた。秀行は船場にいて魚の浮流を眺めてよろこんでいたという。このため出倉下から岩坂下までの魚虫は皆死滅してしまったが、霊魚のウグイだけは渕の底に深く潜って、一尾の死もなかったという。このとき霊魚の不思議さに秀行はじめ驚き、仏徳のおそろしさを感じたと伝えている。然しこの仏罰のためか、秀行は翌十七年五月十四日に大病の苦しさに悩まされて死没したが、当時の庶民は虚空蔵尊の崇りであったと秀行への同情者は少かったという。

慶長十六年八月二十一日辰ノ刻。会津は大地震のため、民家は勿論堂塔神社のほとんどが倒壊した。わが柳津も本堂本坊が倒れて、大鐘鰐口など木材ともども只見河中に流れ去った。大岩盤が裂けて亀石と畳石その他が転び出て只見川の東側に入ったのもこのときである。また仏殿本坊僧舎民家の倒壊も多く、庄死したもの数知れぬという悲惨事であった。地震のため椿村の河中に急に突出した岩と山崩は、只見川を堰止めて湖水化し、柳津の人は諏訪山に登った。この山頂さえ水没しない処僅かに数十歩とあり、向岸に瑞光山の山名がつけられたのもこの時であり、また真言宗に改めたのは、翌十七年であった。これまで五世間は曹洞宗を行じていた。この災害復旧に努力したのが宝海上人で、霊夢を得て塔寺の再建を企て東奔西走した。月光寺裏に通称「法界壇」（宝海壇）はこの上人の墓と推考されるが後日の調査を期待する。この努力の結果、河畔近くに本堂のあることは、水災の憂いあるため、紀伊侯夫人の特別な立願成就

の奉謝として、巌壁上に移築することにより、元和三年（一六一七）に現地に大堂建立された。しかし夫人早死のため、細部は未完成であったが、虚空蔵尊がこの景勝の地に祭られたことは、よほどの決断によったものであるし、その結果は柳津虚空蔵尊の仏徳と景勝柳津を広く宣伝され現在の隆昌の端を用いたというべきである。時の宥印法印と宝海上人は、円蔵寺所有田圃の面積を示す境界を定めている。元和六年（一六二〇）俊精法印が住持となる。寛永二年（一六二五）法印は岡本坊、杉本坊を相手に争いをおこしている。寺の公事（くじ）でその内容は知る事ができない。この年宝海上人は住持となるが、寺堂の復興のほか、本名村の良材ある山に蛇蝮の棲めるため出材不能ときき、この蛇蝮祓の読経修法を行うと共に、村民飲用水の不足の出泉祈祷をしてその苦しみを助けている。

寛永八年（一六三一）四月大洪水となり、円蔵寺須弥壇まで浸水した。このとき水魔を鎮めるため龍蔵祠に神楽を奏している。龍蔵神は水神でもあり、また坂ノ上家の先祖の曽木拾取の人でもある。このとき巨鐘も流失した。

寛永十七年（一六四〇）三月十八日夜半、柳津川北悉焼失した。この復興に官給木材あり、杉は細越、欅は青坂、松は郷戸の各山から伐り出し六月完成した。

同二十年（一六四三）四月六日一王町大火で悉焼亡、このとき法岩和尚は一王町民居の境改めをする。諏方神社も七月十七日祭典を行っている。慶安二年（一六四九）三月二十三日仏殿葺替落成、同三年三月二日またまた川北火災で悉焼亡した。同四年には舞台の破損甚しいので、法岩住持は、官材の杉を近村に求めて修理を完成させている。ついで明暦二年（一六五六）三月九日と延宝六年（一六七八）十一月八日の二回は月光寺が全焼している。いつも再興には非常な努力を住持も檀信徒も努力したし、末寺として円蔵寺も支援をしたのである。

寛文五年（一六六五）正月二十五日門前町から出火し、全民家ほとんど罹災した。一王町にあった如意庵もこのときから廃庵になり、庵主は本村外に移居してしまった。これは三十六坊の一であったろう。この年五月那須宗高裔常英は七尺の長刀を本堂に寄進した。

寛文十年（一六七〇）七月二十一日藩臣で神道学者の吉川惟足が、これも神道家服部安休を従え来柳した。このとき藩公の使者は柳瀬三左衛門である。寛文五年から十年ころまで保科正之は、領内の神社寺院を調査し、神仏分離の政治をなされていたので、この参拝は重要な意味があったのである。十一月朔日には、須弥壇が新調された。道俗の人達が毎月十三日に建福庵に参詣して、若干宛の浄財貯蓄によった奉納であるという。

延宝元年（一六七三）五月二十五日、泰州和尚は藩に請うて渡舟二隻を新造し、新舟祓いの読経のため始めて乗舟している。これ以前にも小舟はあったようである。

延宝四年（一六七六）一王町半焼したが、堂寺は無事だった。

延宝五年九月十七日には、龍蔵祠（虚空蔵北口）の祭日を九月十

一日に行うことに改めている。これまでは十一月十七日で風雪をみることもあったためである。

「改竜蔵祠祭日為本日（九月十一日）前是以十一月十七日、雖然寒風積雪。為祭事不便宜也」

と記してある。

延宝六年五月二十四日午刻、沢町から出火して川北悉焼失した。このときも寺と本堂は難を免かれている。

延宝七年十一月十四日辰刻、大鐘が自ら鳴った。泰州和尚はこのため早朝に、大般若経を転読し奉って、国家安泰と庶民快楽を祈願し、信徒たちの自鳴凶変あると恐れたことの不安を静められた。

天和二年（一六八二）六月八日巌下壁にはじめて大日堂を新築して供養をしたところ、自然とこの堂下の岩腹に大日如来の尊像があらわれた。長い風雨雪にさらされて剥落したが、今にその尊容は拝されるので、参詣者は絶えない。

貞享二年（一六八五）九月二十六日、学僧松陰和尚は円蔵寺の歴史とその資料の散佚を防ぐため、苦心して『霊岩雑記』を編集した。これはまことに賢明なことで、これまでの諸資料は整備され後世に伝えられてきた。松陰和尚は、内外の書数百巻を読破したという。その跋文に、

「当山年代遠祖而。旧記已泯絶、故来詳故実也、先年依官命、標出創建来由與歴代之事跡、以上皇公庭、是以予所聞古老之片事、粗記之、以繫千年月下」

とあり、編者の意をくむことができる。

尚、元禄二年（一六八九）の戸籍をこの中に記してあるので、ここで後日の参考のため記しておく。

「貞享二年十月戸籍日、戸三百六十六。竈三百九十一。男五百十五人。女四百十四人。漆木千六十五本。貢蝋二十二貫三百六十五銭。貢漆十盃六合五勺」

とある。戸数人口を二〇〇年のこのときと比較すると、如何にわが町が発展してきたかの感が深いのである。天保時代になり、この『霊巌雑記』をみた泰寛和尚は非常に松陰和尚の達眼に敬服し「師之霊岩也。真舎人矣哉」と自己の編者の『柳津秘録』に記した。舎人とは奈良時代に『日本書紀』を記述したあの舎人親王のようであるとの意である。更に、

「嗚呼徴師求書。何以得窺文字乎。師之於旧書也。真篁矣哉」

と絶賛し、ここでまた奈良朝の史家小野篁に比して賞揚した。寛泰和尚はこれに強く刺激され、天保六年（一八三五）夏五月、これと蓄積していた文書を整理し、有名な『柳津秘録』を著作したのである。

この松陰和尚は向岸の瑞光寺に退穏し、元禄九年（一六九六）六月十五日、瑞光寺で大往生を遂げられた。このころ瑞光寺はまた完全な建築であったのだろう。

御曽木を拾われた坂上氏の末裔から出た人は、常鈍首座で、この名僧松陰から住持をついだ人である。元禄十年六月十八日に入寂さ

れた。元禄十四年（一七〇一）官命があり真言宗に改宗した。自らの改宗でなく官命となるのは寺に事情のあったことを示しているが、遺憾ながらその事情を求める資料が見あたらない。真言宗仁和寺派に属した。この改宗は泰岳和尚の時である。越えて享保二年（一七一七）八月、官命によって出倉村下流六町、両岸殺生を禁じられた。松平三代藩主正容の命で、はじめて公式の文化財保護指定となった記念すべき時である。勿論それまで盗み殺生する人があったのかも知れない。魚渕はこのときから現在まで実に二六〇年近く完全禁漁の歴史を飾ってきている。この布告の際の住持は鼎宗和尚である。

享保十三年（一七二八）五月、柳津村の善助が永井村の大川深渕で投網を行った。容易に挙がらないので翌朝人を頼み網を引きあげたところ、輝くばかりの観音像であった。善助は恐れ敬い時の住持と謀って観音堂一宇を建てて祭ったという。

この年、円蔵寺は神仏秘像の御開張を行うことを官の許しをうけて行った。この稀な祭りに遠近からの参詣者が雲集し、向岸（瑞光寺山）の参詣者は織るような舟の往復でも運ぶことができず、瑞光寺前の松樹の下に遥拝所まで作った。賽銭雨の如くに投げ、そのため銭の丘が出来たと記している。信仰の厚さを証する資料である。

「因設拝所于向岸松樹下、使彼輩遥拝之、投銭如雨、日積如丘」

と秘録は書いている。

寛延元年（一七四八）秋、虚席兼住の代に、本坊の造立をはじめ同三年完工した。慶長大地震後の小本坊は一三〇余年の年月がたち柱根半朽、棟梁将に傾き、危険さえ感じるようになったので、土木に心をつくし遂に落慶した。

また虚席和尚は、柳津の火災と水災が他の村々より多いことを知り、会津藩と協力し柳津に蓄米三十七俵を備え社倉に模して、水火難飢饉に備えた。社会福祉の草わけの慈善事業である。然し惜しいことにこの倉は、文政の大火に全焼してその後は絶えたのである。

宝暦十二年（一七六二）七月。岱翁和尚住持となり、のちに柳津の兼住になった。和尚は巨堂寺建設の借財の多いことと、その返還に心を痛め、粗衣粗食の生活を続け、冗費を省いて借財を少しでも返済しようと苦心された。

「師寡欲淡白耳、奢侈自生服食踰度、借財益増若其償債、我等所慎専在此、謁大君時其服紙布也　縁以絹倹約可知也」

とある。そのため、

「本坊借財殆歳以償之、借財殆滅」

とある。僧侶の本質的な生き方に徹した人であった。また文筆にも練達され『奥之院蒐録』を編集されて、その文の中に、

「夫世人物故、而求法名者云葉世締之虚名帰仏門之実相標準也」

とこの僧の崇高さを知ることができる。こうした先代の名僧の任があってこそ、円蔵寺は衰えることなく法灯は輝いてきたのである。

安永九年（一七八〇）二月十四日子ノ刻、浴室から出火して本坊は悉く焼失した、寛延三年落慶から僅か三十年間で、信徒は涙を流してその焼跡を整理した。それに負けず信徒は飢饉を侵して、天明

六年（一七八六）六月客殿は再建された。村民は食糧難で飢えていた。このときの住持天龍和尚は、借財と村民救済のため見星庵主と長谷川氏とはかり、年賦五十両の富会（今の無尽）を結んで、救済の慈善事業を行い、客殿の細部の工事は未完のままにした。これは寛政五年（一七九三）五月に名匠を招き、天花を飾り菱花を刻み、補飾を補った。

享和三年（一八〇三）五月二日、寺近くの沢の崖上から土石が崩れおちた。老婆一人と住居はつぶれたが、圧死を免かれた。またその上に本坊用水があったので、寺側としても心を痛めた。杉本坊・見星庵・建福庵はこのころ次々と廃庵坊になっているようである。

文化二年（一八〇五）七月、本堂開山大法会を施行した。このとき文化三年にあたる徳一円蔵寺開山一千年の法会も行ったのである。

「文化二年七月本堂啓龕行大法会、徳一開山、歴数千歳在千明年、予以行之」

と記してある。大同二年（八〇七）で文化三年（一八〇六）まで一千年、この歴年も正しく計測されたのに驚く。年表もない時代の僧侶の博学のためである。この大法会を施行したのは旭州和尚なのであった。

その後の文政元年（一八一八）六月十五日午刻、円蔵寺の失火で本坊・本堂、三重塔は全焼亡した。三重塔は文化五年再建して僅か十年の新しい塔を失って、それ以後今日まで三重塔のあの美しい姿は永久に消えたといってよい。このとき奥之院・月光寺・滝沢寺及び民家十八軒は漸く難を免れたのは幸いであった。この難に遭われたのは喝岩和尚である。焼失後和尚は若松から勧進した。毎戸毎日一銭の拠出五ケ年を続け、そのほか各方面の寄進により、文政三年庫裡上棟をした。この火災から円蔵寺は虚空蔵尊の隣地の現在に建て替えられることになった。

文政十一年（一八二八）本堂の大柱をはじめて牛の力で集材し、始めて大柱の建てはじめの工事が起った。八月にはすでに上棟の式を挙げるまでになったのである。会津藩からは機材を借り、そのほか借金数千両に及んだ。喝岩和尚は江戸幕府まで上り、借財銀座三千両、これを年賦償還しようとし、封内銀鉱を探し採鉱にも協力した。寺と藩と信徒の総合的な復興の情念は達した。この年の文政十二年（一八二九）八月十三日本堂は見事に落慶した。そしてその日おごそかに遷座式は行われた。

虚空蔵堂もこの年に完工した。巌頭に唐破風と入妻破風の二重建造物は、七折以西はじめてなのであった。遠近から仰ぐこの岩のかけ造りの王城にも似た豪荘なお堂は、福満虚空蔵尊の無限の慈悲と仏徳を具体的に象徴したものと感じたのである。しかし借財は莫大であった。このあとを継いだ香林和尚は苦心したらしい記録がある。

「天保五年（一八三四）官府借財子本相増、不能後了。請免子銀、官府審察其寛允之。又請諸村、毎歳出米四升八合以復之亦允之也」

と官府の借財には利子を免ぜられ、各戸及び信者は毎年米四升八合を寄進して、難渋の生活を続けつつ返済している。このころ天保六

年（一八三五）柳津村様子の記事があるので掲げてみる。

「戸数・百有五軒、人口・男二六〇人、女二四八人。貞享戸籍と較べ、減戸二六三軒、減男二五五人、減女一六六人」

とくわしく記録してある。後日の参考となると思うので示した。

円蔵寺は法灯一千百有余年。今も年六十万人近い善男善女の参詣者を福満虚空蔵尊を傍らにして偉容を誇っている。

昭和五十年この境内に円蔵寺会館を建て、遠くからの参詣者の休憩所として無料で提供している。また毎年施餓鬼供養、戦没者供養を行うほか、磐梯山爆発（明治二十一年）の犠牲者の供養も行った記録が保存されている。

古くから人間の本性の中には、福寿禄の三徳を望む心がある。福は子福で子孫を、寿は長生を、禄は財宝なのである。徳一大師が人間の哲学に徹していた学僧であったため、この願望を満たさせて幸福な生活に導き、そのためにもこの世に極楽を具現させようとの考えから、福満虚空蔵尊を奉祀されたことでもあろう。円蔵寺はこうした大きな精神文化の一大拠地として尊ばれた巨寺の古刹なのである。

なお、円蔵寺歴代の住持を左に記す。現在の水野興宗師は五十八世である。

円蔵寺歴代住職名

興禅開山　大圭義璨和尚大禅師　應永七年三月八日　示寂

当山二世　金蔵和尚大禅師　不詳　慶長四年五月四日　示寂

大蟲宗岑禅師　元和二年十一月二十一日　〃

心安宗可禅師　不詳　〃

泰安禅師　寛永二年九月九日　〃

逸伝宗歴禅師　寛永七年十二月十六日　〃

興禅中興　南宗禅良禅師　寛永十三年六月二十一日　〃

三十三　雲澤専理禅師　寛文十二年十月二十五日　〃

三十四　天祐宗穏禅師　元禄五年七月七日　〃

三十五　境山元愚禅師　元禄十年二月七日　〃

三十六　泰州宗忍和尚　貞享二年二月二十三日　〃

三十七　覺幻禅慧和尚　享保三年十月十日　〃

三十八　葉伝智単和尚　元禄九年六月十五日　〃

三十九　松陰祖周和尚　元禄十五年七月一日　〃

四十　関宗義超和尚　享保十七年正月十七日　〃

四十一　泰岳智融和尚　寛保元年正月一日　〃

四十二　鼎宗東観和尚　宝暦十年二月二十八日　〃

四十三　俊道全芝和尚　寛保二年六月十七日　〃

四十四　徹叟智永和尚　寛延元年五月十八日　〃

四十五　越道祖北和尚　明和七年八月二十二日　〃

四十六　陽門祖春和尚　文化九年十二月二十日　〃

四十七　岱翁祖隆和尚　文化二年十月二十六日　〃

四十八　大仙祖椿和尚

四十九　天龍祖潭和尚　文政元年十一月五日　示寂
五十　璋峰宗琨和尚　寛政十二年四月十二日　〃
五十一　旭洲智暁和尚　天保元年七月十六日　〃
五十二　喝巌宗環和尚　天保三年十二月十三日　〃
五十三　香林祖集和尚　慶應二年十月六日　〃
五十四　願戒祖錬和尚　明治七年十二月四日　〃
五十五　弘田祖琳和尚
五十六　忠室祖誠和尚　明治二十七年十一月十一日　〃
柏宗玄瑞和尚　明治二十七年三月十七日　〃
泰巌至堅和尚　明治三十九年六月八日　〃
五十七　堪宗祖柳和尚　昭和十一年十月二十五日　〃
五十八　興宗　和尚　（現住）

円蔵寺の宝物

円蔵寺の宝物も信仰層の厚さと広さによって多く所蔵されている『新編会津風土記』によると、

- 大黒立像一躯（長五寸、空海作）
- 金剛二王立像一躯（長四寸、空海作）
- 不動石像一躯（長三寸、自然石）
- 仏頂黒点舎利（鑑真和尚帰化の際の護持のものと伝う）
- 牛王一顆
- 虚空蔵小像一躯（長二寸、厨子入）
- 七福神小像（榧実の中に納む。厨子入）
- 阿弥陀経一軸（中将姫筆）
- 八仙人花瓶一口（玄宗皇帝の物と云う）
- 姿見鏡一面（忠郷母堂の寄附）
- 定家墨跡一軸
- 三面大黒畫像並讃一幅（心越筆）
- 賓頭盧阿羅漢画像（顔輝筆）
- 山水畫一幅（謝天祐筆）
- 八景詩歌一軸（直江山城守兼続筆）
- 太刀一口（長九尺、無銘葦野左近寄附）
- 古文書（前掲）
- 柳津虚空蔵尊絵巻縁起（雪洞筆）

柳津虚空蔵尊絵巻縁起

円蔵寺に附属するものもまた非常に多い。現存しないものもあるが、円蔵寺が如何に規模が大きく、信仰の善男善女の多いかを知る手がかりともなり、歴史のふるさとを考えることもできる。

- 仁王門は麓から岩石を刻んで石階とし、四十七級（現四十五級）を昇ったところに建つ。その規模は四間余に二間半南向である。

両側に阿吽の二王がたち、うち一躯は空海の作と伝え、他の一躯は作者不明であるといわれたが、現存のものではない。

円蔵寺の年中大祭と行事

元朝参り　陰暦正月元日午前〇時開門する。年中最高の信者で賑う。元日より三ケ日毎早朝大般若経転読し奉る。

四日堂　陰暦正月四日午前十時衆僧虚空蔵堂宝前に会し大般若経転読（元日より転読、本日満散）祈念し一年の日数を擬し、三六〇余葉の護符を撒く。拾った者は当年の吉兆と喜び之を競い拾う。おわって円蔵寺庫裡で信者の年頭挨拶を交わす。

七日堂　陰暦正月丑の刻をトし牛王の黒影三六〇余葉を棍頭に挟み宝前において祭典を行い之を堂外に撒く。此の日は特に講中の参拝者多く、一名裸参りともいい、寒風積雪をも厭わず裸体となって押し合う。当寺三大祭典の一つで、当日の参拝者実に数万を数える。

丑開　陰暦二月丑の日毎に参詣するもので、当日詣ずる者はその年中災厄を免がれ福徳を得ると信じられている。

初午　陰暦二月初午、丑満刻宝前で祈念し、常夜燈の火を移し、それを参拝者に分ち与え、之を受けた者は家に持ち帰り、一切の火の種火となし年中の火除となす（火災潜消）。

円蔵寺に附属するものもまた非常に多い。これらによって古くから如何に規模が大きく、信仰者の多いかを知る手がかりともなる。

。明星天宮は石階の東側にあり、二尺四面南向でこの下に明星池がある。深さ三尺余、周五尺ほどの小池であるが徳一大師が加持祈祷して泉は湧出したと云う。塩分を含み眼疾によく効くといわれた。

。子安観音堂は本堂の巳の方にあり、三間四面南向であったが現在は焼失してない。

。観音堂、この堂は子安観音堂の下にあり、七間に三間の御堂で西国三十三ケ所順礼観音の像を祭った。会津三十三観音参りの総くくりとして、必ず柳津に参詣するのは、虚空蔵信仰とあわせこの観音堂に参詣している。

。文殊堂、本堂の巳の方の四尺四面で北向である。中に文殊菩薩を祭ってあった。

。大仏、文殊堂の側にあり、黄銅製で坐像長四尺計であったが、戦中出征した。

。弁天堂、本堂の寅卯の方にあり、銅像の長一尺の弁天を祭る。現在はすでに廃蹟地のみである。

。鐘楼、本堂の辰巳の方にあり、基壇の上に二間半に二間で、鐘径三尺六寸の大鐘である。この銘に、

「大日本国会津県大守大檀那藤原朝臣羽柴飛騨守秀行公奉鋳大鎮柳津霊巌山掃部助定次維時慶長十一年丙午年十月十三日」

とある。この鐘は慶長十六年の地震で龍宮渕に沈んだ。

。龍蔵神社、本堂より戌亥の方にあり、一間二尺に一間東向、鎮

座は虚空蔵尊の御曽木を拾いあげた坂ノ上覚之丞を祭神としている。

。宗像神社、本堂の東にあり、五尺に三尺で西南に向う。鎮座の初は不詳である。

。伊勢宮、本堂の傍にある。五尺に三尺の東向で鎮座の初は不明である。

。稲荷神社、本堂の西にあり、二尺三寸に二尺二寸東向で鎮座の初は不明である。

。大日岩、本堂の巌下巳の方にある。岩肌に大日如来の像を空海が彫んだという。しかし天和元年（一六八一）六月、大日像自然に堂下岩腹にあらわれ、六月八日大日堂始めて建立した。もう風化してさだかでなく、彫跡が浅くなったので、どこででもいう「瓜彫り」ともいう、その前に岩を利用した小参所がある。

。両蛇石、只見川の東岸にあり、形状をもって、雄蛇石、雌蛇石ともいう。

。明星石、この石の上に巨人の跡があるという。

。燈明石、昔、龍が石上に灯籠を現わしたという。

。烏帽子石、只見川西岸の小巻村の境内にあるが、形が烏帽子に似ているのでこの名をつけたという。本堂景勝に欠くことのできないものであった。

。宝珠石、これも西岸にあって、その形状が宝珠に似ていたのでこの名をつけた。

。愛宕地蔵堂、円蔵寺の南向山の頂上に祭られている。火を鎮めて火難のないように守護される火除け地蔵尊である。一時は愛宕神社と称したこともあるが、神霊の迦具土神は現在では諏訪町の諏訪神社に合祀された。現在は仏教行事の管掌に入る地蔵尊である（別項参照）。

奥之院（門前町）

本尊　明星天子

この名の示すように、円蔵寺の奥に建つ下寺で、記録によると大同年間（八〇六―八〇九）に、徳一大師によって創建されたものであるという。当時はもちろん法相宗であった。古い時代は「奥院」と記して「オクノイン」とよんでいたが、いつの時代にか「奥之院」とするようになった。円蔵寺背後の山の中腹にあり、境内東西四十間、南北三十三間の免除地となっている。

至徳二年（一三八五）年中に、円蔵寺の住持義乗師が、本寺の法相宗を改めて会津若松市の興徳寺第三世大圭に嗣法させてから、臨済宗としたので、この院も同宗となり山号も「松沢山」と称するようになった。その後真言宗、再び臨済宗と改めている。そのため大圭和尚は中興の僧とし、また興徳寺の末寺となっている。天和三年（一六八三）五月、奥之院再建の工をおこし、八月二十七日落成した。本尊明星天子は、仏教でいえば虚空蔵尊の御同菩薩で御別体と

いう信仰がある。本寺円蔵寺と盛衰をともにしてきたことは、奥之院が本寺の隠居寺という寺格から当然なのである。現在の客殿は文政六年癸未夏六月に建立された西向の、七間半に五間の大殿堂である。弁天堂別当ともあるが、室町期の弁天堂建立から、別当をも管掌するようになったのであろう。古松や緑の雑木を背景としての位置、柳津の家々、只見川を望む絶景の地なのである。客殿の裏には樹齢七百余年ともいわれる楓がある。四季折々に七変色し、あたりの紅葉との調和美は、奥之院の景観を一層美しく静寂さを漂わしている。本尊のほかに、虚空蔵菩薩板木が祭られてある。作者は不明であるが、伝承では空海の彫刻であるという。尊像の御長一尺の立像である。この板木由来に、

「此板木天竺愛樹ト云木ニテ弘法大師御作也、船中難疫病火災盗賊矢除安産福子為衆病悉除空海之加持也」

と刻してある。虚空蔵尊及賓頭盧尊と同木である。この尊像は秘仏として、扉深く祭られてある。板木の尊像は上に瓔珞のある天蓋を垂れ、その下に円光背を持ち蓮台に立つ像である。右手は与願印、左手は施無畏印を組み、柔かな天衣の丸み、美しい衣文、義軌による立派な菩薩像としての姿態である。この板木像は非常に御霊験があらたかで、崇敬者も多い。柳津虚空蔵尊像彫刻の原型であったと、第三世現住大竹敬宗師は話されている。

また、当院には奥殿がある。客殿の東隣りの妻入母屋造りである。これは冬木沢八葉寺の阿弥陀堂（国重文）と同形式で、妻入母屋造りの堂は全く数少い堂である。これを「釈迦堂」と称している。木造で頭北面西の釈迦涅槃像である。御長一メートル。右手を枕にした高さ二十八センチメートルの寝釈迦像で、二月十五日の涅槃会をこの奥之院では相当大規模に行われたので、この日雲集した参詣人の仏法尊信を考えることが出来る。脇侍として、不動明王、地蔵菩薩が祭られてある。近年堂宇の修補も行われて、実に荘厳の威を深くした。またこの釈迦堂に、数は少いが、木製五輪塔がみえる。祖霊の安穏と子孫の御守護を祈願した大切な奉納塔である。またこの堂下の土中には、一字一石経の石がある。いつの頃にか、経塚かまたはこの堂の礎石の基礎に納経したもので、古い尊信の証拠として保存しておくべきである。

庫裡に慈母観音像が祭られてある。門前町の婦人観音講のとき、ここから講元に移されて御詠歌をあげ、安産と子供の無事成育を祈りつづけてきた尊像である。遊行仏として日本の固有信仰と結びついているのは、貴重な民俗行事として永く続けさせたいものである。

奥之院弁天堂

また奥之院には国指定重要文化財（建造物）の弁天堂がある。室町中期の建築物で、宝形造、禅宗様式である。中央須弥壇上には、法量一尺二寸の弁天像が祭られてある。全体が極彩色の華美を尽した建物で、六百年以前にこの建造物を拝んだ会津の人たちの驚きは想像にあまりある。この建築物の文化的価値は別に記す（第七

章観光参照)。

なお、柳津町の遠い祖先が水神信仰に(特に弁天)熱心であったことは、只見川、銀山川の合流点に定住したため、水神の荒魂(あらたま)鎮(しず)めとした信仰史として貴重な価値あるものである。また六道図絵がある。極彩色で縦一七〇センチメートル、横一五〇センチメートルの上段に九品の極楽浄土絵を下段には地獄の苦難を表現したものである。こうした絵図は真言宗時代の教誨に用いられたものと考えられている。

この奥之院には慈悲にまつわる史実がある。天正十七年会津芦名氏を伊達政宗が討伐したとき、瀧谷の山ノ内俊次が逃げてここに隠してほしいと願った。時の住持が心よくかくまってくれたという。この俊次は源頼朝によって横田城に封ぜられた山ノ内経俊の十八世の子孫で、横田城の陥れられた時は、僅か十三才であった。この人こそやがて偉才横田三友の父で、母は若松の町検断倉田為実の二女徳子なのである。ここでみ仏の慈悲がなかったら、会津の学問史や会津藩教学を書き換えなければならなかったろうともいわれるほどの碩学者なのである。

本堂の中央にある明星天子の厨子は手のこんだ構造である。入母屋造りの二重扇垂木、柱貫を加えた禅宗様式のものである。棟札がないのでいつの時代かは不明であるが、一部破損しているので近く修補する予定であるという。また寛延三年(一七五〇)虚席和尚は、萬霊塔を奥之院に建てるため、人夫三十余人で巨石を石階下まで運んだが、急坂で登ることが不可能であった。そのとき住持は前を皆に、後をただ一人でかつぎ引上げたので、和尚を三十五人力と嘆賞したという。

昭和四十四年ここの弁天堂保存のため、火災防火用として二基の放栓及び自動警報器・避雷針塔を施設し万全を期している。

ここに、奥之院歴代住職名を記す。

第一世　敬翁長老禅師　大正六年十二月二十三日

第二世　正堂玄順禅師　昭和三十五年三月五日

第三世　敬宗昭道　(現住)

初代以前の当院住職は、古例に依り円蔵寺及び興徳寺より当院に隠居転住したのである。

第四節　わが町の修験道

わが町には法院として伝えられている家は四戸ある。この家には修験道(しゅげんどう)を修めた法印(ほういん)(山伏)がいて、北田家のように祈祷所を別棟につくったり、船木家のように特に本社を遥拝する独特の遥拝所を持ったり、また石坂の岩渕家や南田代の小野家のように、東北法院通形の奥座敷正面の入口を玄関として、そこから信者の出入するような構造とし、入室すると直ちに正面に法印の尊信仏の大日如来か、不動尊像が祭られているものもある。この建物を法院と称し、本山の元寺から法印の名称を許可されていた。そしてそこに住み庶民の祈祷をする人を法印と尊称し、我等とは異った法力を持った祈祷師